

概 要 報 告

実施期日	令和7年8月4日(月)
部 会 名	中学校 総合的な学習の時間部会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『3年間を見通した総合学習の計画と展開～探究学習の取組～』

提案概要

○ 提案校では、これまで総合的な学習の時間を学年ごと1年間で完結する学習内容で行ってきたが、令和5年度から3年間を見通した体系的な学習へと変更することにした。

3年間の学習内容は

- ・自分たちの住む鎌倉を調べる
- ・地域がどのように活性化されているのか、行政と企業がどのように関わっているのかを学ぶ

ことである。

○ 生徒の実態として、与えられた課題には対して熱心に取り組む一方、自分たちで課題を作り出すことに苦手意識をもっているため、教員は生徒の主体的な学びを生み出すための取組について工夫した。

- ・1年次は「わくわく感」を生み出す取組みとして、まちのコイン（クルッポ）のアプリを使用することから体験的に学ぶ機会を持ち、クルッポを導入している事業所へのインタビューを行った。また、インタビューの仕方については鎌倉在住の映画監督を招き、本格的な撮影方法を学んだ。
- ・2年次にはさらにブラッシュアップさせるための取組みとして、同じ映画監督より「非言語表現」の映像表現について学び、企業のPR映像やドキュメンタリー映像を制作した。その際の探究テーマを4つに絞り、探究テーマ（「自然環境」・「伝統や文化」・「ものづくり」・「社会への貢献」）に基づく事業所を自分たちで決定できるようにした。
- ・3年次は1・2年次の学習を生かし、修学旅行先である岐阜県飛騨市・高山市の地域活性化の取組を知り、自分たちの住む鎌倉の地域活性化につなげて課題解決を図るという視点で学習を進める予定である。

○探究的な学習を生み出すための工夫として、予めインタビュー内容の予想を立てたり、核となるワードを多用したりすることから、自分たちで課題を見つける意識が高まり、他の教科での見方・考え方を働かせながら横断的な視点をもって学ぶことができたり、小学校の学習とは違った視点で地域を見つめ直すきっかけとなったりした。

○聞いたことをアウトプットするだけにとどまってしまうたり、現地や資料などで得た情報をまとめただけの発表になってしまい、生徒自身が考察した内容が乏しかったりするところもあった。

質疑応答

【質問】 自校も3年間の体系的な学びとして、総合学習を行っているが、生徒に問いを立てさせることが非常に難しい。「〇〇について知ったが、どう深めるの？」という生徒が多く、問いを立てるタイミングなどがうまくいかない。提案校ではどのように工夫しているのか。

【回答】 1年次に鎌倉についての体験や調査を重ねて現状をよく理解した上で、2年次に問いを立てるようにしている。1年次の「知る」という体験・調査が充実していることが問いの立

てやすさにつながっていると思われる。総合的な学習の時間の年間計画では、2年次の鎌倉学習は9月にスタートさせ10月からその学習に1本化して進めている。

協議の柱及び協議概要

【協議の柱】

- ①児童・生徒の主体的な学びを生み出すための工夫
- ②小・中学校の総合的な学習の時間の単元の作り方

- 体験・ICT・ゲストティーチャーなどの活用によって児童・生徒のやりたい気持ちを引き出すことで教師主導となりにくい。また、地域の「材」を生かしたテーマ設定は生徒にとっても身近であり取り組みやすいが、この場合は小・中の連携を密にして学びが重複しないように配慮することが必要である。
- 時間や人員の確保ができないことなどの理由から、テーマを選択制にしてしたり、学習形態に制限を設けたりしているが、基本は児童・生徒の興味に沿ってやってみたいことを深められることが望ましい。教師の思いと児童・生徒の反応のギャップが大きいことがあり、計画にしばられてしまうとうまくいかないこともあるため年間計画はあくまでも計画として扱い、児童・生徒の実態に合わせて調整することが必要である。
- 児童・生徒がやりたいことを予めアンケートを実施して把握したり、他学年で行っていることを知らせておいたりすることから、次年度以降のイメージをもたせておくことも有効的であった。
- 主体的な学びを生み出すためには、発表（アウトプット）のスキル指導も大切である。
- 総合的な学習の時間における単元の作り方としては、系統性を意識することが重視され、中学校では3年間で1つの学びを完成させるイメージが強くなり始めている。1つのテーマだと生徒の興味を継続することがなかなか難しい。また、単年での課題設定はいろんなものに触れる機会が増すというメリットはあるが、テーマが変わるだけで同じことを繰り返すだけの学習になってしまいがちになり、総合というよりは社会科の調べ学習になってしまうという課題があげられた。設定したテーマを生徒がいかに自分事として捉え、構成することができるかが単元づくりのポイントとなる。
- 「どんな人と関われるか」を想定してできることを組み立てたり、最終的な発表の方法から逆算して組み立てたりすることによって、日程調整や学校行事との絡みもあり、どうしても教師主体になってしまう部分がある。

まとめ概要

- 学習指導要領「探究的な学習における児童・生徒の学習の姿」にあるように、らせん状に何度も繰り返すことでつきたい力が積みあがっていく。教員がそのサイクルを念頭に入れて授業計画を立て、発達段階に合わせて指導していくことが大切である。
- 多年にわたって同じテーマで行う総合学習では、児童・生徒に1つのテーマで継続して興味をもたせることの難しさに悩みをもっている教員が多く見られた。その中で、3年間を見通した取り組みのモデルとして本提案は大変有意義な提案であった。提案を「鎌倉」という自然や文化に魅力ある街ならではの取り組みとしてみるのではなく、それぞれが自校に置き換えた際に生かせることを見つけようと協議できたことが成果である。
- 児童・生徒が自ら追究しようとする姿が総合的な学習の時間のゴールであり、扱うテーマや材が違ってその姿を引き出すためのしなやかさを教員が投げかけて導く必要があることを、協議を通して再確認した。